# 能動的に見ることを育む
## ― 考現学的視点とフィールドワークを通して ―

# Cultivating Active Watching
## － From the Viewpoint of Modernology and Fieldwork －

ネットワーク情報学部　専任講師　栗芝正臣

School of Network and Information　Masaomi KURISHIBA

**Keywords**: Modernology, Fieldwork, Active watching, collecting, drawing

## 1. はじめに

マスメディアやインターネットの普及により、二次情報（すでに誰かが編集した情報）を簡単に手に入れられる今日において、その情報をどのように批判的に読み解くかというメディアリテラシーは盛んに議論されている。また、このところの多様化した戦争報道により、事実の伝え方は一様ではないということが誰の目にも顕かになったこともあって、視聴者の目は確実に批判的にマスメディアを捉えるようになってきていると思われる。しかし、マスメディアを通した情報を見ることについては学ばれるようになったが、その一方で日常的な生活の中で自ら物事を能動的に見て、情報を獲得する、情報を表現というかたちにするという姿勢をいかに学べば良いのかについてはあまり省みられていないのではないだろうか。本稿では、現場を克明に観察することを主眼としてきた考現学とフィールドワークという視点から、能動的に見ることという、あまりにも当たり前だからこそ、おろそかになりがちな部分を探ってみたい。

## 2. 叫ばれるメディアリテラシー

たくさんの情報がやり取りされる今日、その情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に読み解く能力としてメディアリテラシーを学ぶ必要があると盛んに言及されている。関連書籍も枚挙に暇が無いぐらい出版されている。たしかに、マスメディアやインターネットから大量の情報をただ受動的に受けとって、その情報に躍らされてしまうのではなく、批判的に読み解いていくことは重要である。

しかし、今日のメディアリテラシーの主張には、やや欠けている点があるのではないかと思われる。それは、マスメディアから流される大量の情報に対して、「受けて」がどのように情報を読み解くかに重点が置かれ、生活世界を自らの目で能動的に見て情報を獲得し、表現として語るという姿勢があまり省みられていないのではないかという点である。

もちろん、実際にインターネットで情報を発信してみるとか、カメラを持って番組を制作してみようというメディアを通した情報の「語り手」としての取り組みも試みられている。例えば、筆者の住んでいる自治体でも「市民テレビ局」という主婦や大学生などの視聴者ボランティアを中心として、30分程度の番組作りが行われている。企画から取材、編集、ナレーションとすべて自分たちで制作することにより、普段見ているテレビの見方も変わってきたそうである。たしかに「語り手」の視点を獲得するためには、実際に作り手として表現し、語ってみることが一番の近道である。しかし、「語り手」としてのメディアの文法、表現方法を学ぶというのは効果的であるが、まだまだこのような機会に恵まれている人は少ない。高校や大学における事例においても、このような番組作りを行う実践においては、専門家による相当のお膳立てが行われているのが実情である。筆者も高校において映像関係の授業を担当しているが、「番組作りをしてみよう」というような映像制作workshopの準備には数多くの教員の並々ならぬ準備が必要である。これは専門的な機材の準備やルールを学ぶためにある程度致し方ないことでもある。しかし、マスメディアを通した見ること同様に、自らの目で生活世界を能動的に見るという姿勢を普段から身に付けることも必要なことではないだろうか。それを表現という語りにつなげていくには、このような特別な機会や支援を待つのでは物足りない。もっと日常的なことからその姿勢を学ぶことはできないだろうか。

表現活動は情報の「語り手」と「受けて」の循環により成り立つものであり、それは相互作用である。「受けて」としての批判的に読み解くという立脚点は前述のメディアリテラシーによってかなり浸透してきている。では、「語り手」としての情報の読み解きはどうすれば良いのだろうか。特に「語り手」としてのメディア実践の機会や支援に恵まれない場合は？　能動的に見て情報を獲得するために、なにかヒントとなる視点はないのだろうか。そのひとつのヒントとして「考現学的視点」を提案したいと思う。

## 3. 考現学（modernology）という視点

考現学とは、聞きなれない言葉だと思われるが、古代の遺物や遺跡を克明に観察・記録・調査して古の生活文化を研究する考古学の対概念として、今和次郎[1]によって提唱された概念である。従って、研究の対象となるのは過去の遺物ではなく、今、目の前に見えていることであり、現在の生活、社会現象、風俗世相を克明に観察・記録・調査・分析することである。今らは民家の実態調査を記録することからはじめ、室内の使い方、道具の状況、現代風俗にまつわる服飾品、街を行き交う通行人の風俗などを微細に観察し、データをとって詳細な記録を残していった。特にその様相を無味乾燥な数字としてではなく、具体的なスケッチとして残したことで、その成果は当時の生活文化を理解する上で大変貴重な資料となっている（図1）。

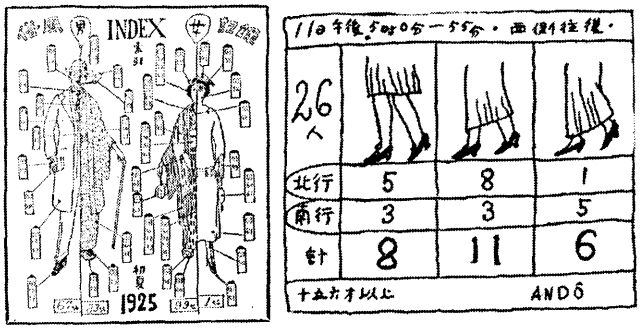



**図1　今和次郎「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録」1925**

今自身は、初めから現在の生活文化・風俗を記録調査していたわけではない。早稲田大学の助手を務めていた頃には、柳田国男らとともに地方の民家の調査研究に従事していた。スケッチという図解で記録する今の手法は柳田にも重宝がられたに違いない。しかし、1923年の関東大震災を契機に視点を農村から都市へと移し、柳田民俗学と袂を分かつことになる。今は震災後の焼野と化した東京を見て、「そこに見つめねばならない事柄の多いのを感じた」（今, 1987, p. 361）という。焼け跡に次々と建っていくバラックや都市の復興を見て、新たに作られていく東京の衰微するものと新興するものを継続的に記録し、現在の変容する姿を記録に留めておかなくてはと考えたのである。まず、今とその教え子であった吉田謙吉[2]は、焼け跡を巡っては、バラック建築とその周囲で使われている道具類を詳細にスケッチし記録していった（図2）。その徹底した観察ぶりは、まるで昆虫採集のようだったので、彼らの調査作業は「採集」と呼ばれていたぐらいである。

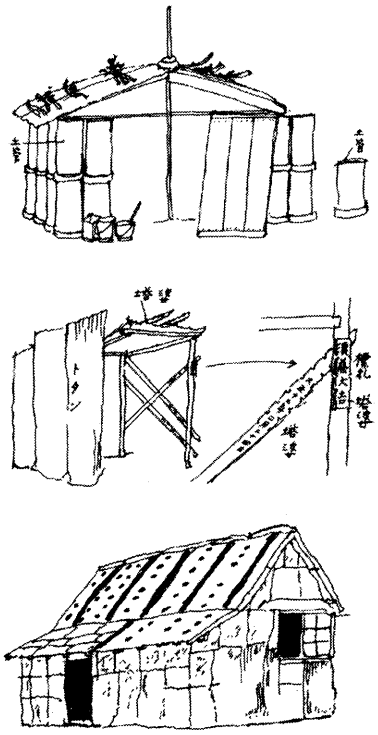


**図2　今和次郎「バラックのはなし」1923**

なぜ、この考現学が能動的に見ることのヒントになるのか。それは、この徹底した観察と記録にある。今はいつもフィールドノートを持ち歩き、気になることを見つけては、次々とスケッチし、詳細をメモしていった。うっかりノートを忘れた時でさえも、レシートの裏やそのあたりにある紙片を使い記録していた。自分の目で見たことを徹底的に記録していったのである。しかも、できるだけ視覚的なスケッチとして描いていたことが重要である。数字データとしてしまっては、専門家がそれらをあらためて読み取らないと解読できないが、具体的な絵としたことで、誰の目にも明らかな現代風俗の資料となったのである。ともすれば、データの羅列になってしまう客観的な資料は、図解されることにより魅力的で生活感の感じられるわかりやすい研究資料として多くの共感をよんだ。実際、これらの調査結果

---

[1] 今和次郎（こん わじろう）1888-1973
東京美術学校（現・東京芸術大学）卒。早稲田大学教授。日本生活学会、日本建築士会会長などを歴任。現代の社会現象や風俗を採集・調査・分析する「考現学」の提唱者。その研究活動は、農村文化、現代風俗、建築文化、家政研究など多岐にわたる。日本の民俗学、民家学、服飾研究、風俗研究などに大きな業績を残した。1930年（昭和5）に吉田謙吉と共編した『考現学（モデルノロジオ）』が代表著述。現在、工学院大学に今和次郎コレクションとして多くの資料が残されている。

[2] 吉田謙吉（よしだ けんきち）1897-1982
舞台美術家。東京美術学校在学中に今和次郎に師事し、震災直後のバラック住宅に装飾を施すバラック装飾社の活動や考現学調査を今らとともに行う。大正時代後半の新興芸術運動にも参加。舞台美術家として築地小劇場などの舞台装置を手がける。

は「しらべもの（考現学）展覧会」として紀伊国屋書店で開催されると、たちまち大きな反響をよんだ。人々はそのような日常的なことが学問になることに驚き、この研究に触発されて全国から採集の事例がよせられたのである。それは、この考現学が誰にも取り組みやすい方法であったということの証であろう。そして、その成果として刊行された「モデルノロヂオ（考現学）」は、今によれば「この一冊を備えない新聞雑誌編集室がないといわれるほど」売れたという。また、二次情報として当時まことしやかに流布していた「銀座の通りには、洋装のモボ（モダンボーイ）、モガ（モダンガール）が闊歩している」という情報を、具体的な調査により間違いであることを明らかにし、単なる趣味的な調べものではなく、学としての研究の質を備えていることも示したのである。[3]

## 4. 観察とスケッチ

考現学の特徴は、この徹底した観察とスケッチによる記録にあるが、スケッチするということをもう少し掘り下げて考えてみたい。現在ではカメラという便利な機器があるため、それを使えばわざわざ面倒なスケッチをする必要などないのではないかと考えられるが、決してそうではない。能動的に見ることを養うためには、このスケッチが欠かせないのである。もちろん、カメラは上手に使うことで観察や採集にとって有効な道具になることは間違いない。見落としていた情報も、撮影記録を何度も見直すことによって改めて発見できることもある。しかし、その威力故に道具に頼り切ってしまうと大切な情報を見失ってしまう。カメラというメディアの落とし穴は、事実を写し取っているという思い込みにある。また、機械は主観の入り込む余地がないので客観的に情報が得られるというような誤解が起こり得る。よくあることだが、対象を撮影したので安心して「後でゆっくり分析をしよう」などと思うと、四角のフレームに区切られた像以外の物事や周りの情況との関係など、多くの貴重な情報を見落としてしまうのである。写真を数多く撮った場合には、何を撮ろうと思って撮影した画像なのか自体がうろ覚えになってしまうことさえある。カメラはある場面を限られたフレームとアングルで切り取るが、その場における意味や文脈は写し出さないのである。

その点、スケッチは全体像から対象に迫るクローズアップと次々と観察者の視点を動かし、まさに見ることによって描けるので、その時の情況が自らの記憶にも経験としてはっきりと残るのである。そして、部分的な事柄を詳細に取り上げたり、それに関連することをサッと脇に書き留めておくことも自在にできる。事実、今のフィールドノートにもスケッチと合わせて、多くの気付いた点がメモされている（図3）。スケッチは現場の意味やリアリティを描き出すには有効な手段と成るのである。

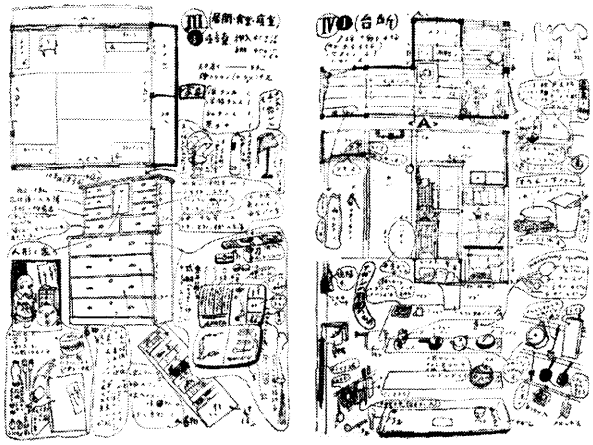


図3　今和次郎「新家庭の品物調査」1926

## 5. 見ることの練習

スケッチすることは、美術・デザインを学ぶことにおけるデッサンに非常によく似ている。デッサンとは木炭や鉛筆で対象となるモチーフの形や明暗を紙の上に描いていくものだが、美術・デザインを学ぶ者は必ずといっていいほどこのデッサンの練習をさせられる。静物や彫刻をモチーフに、ひたすら紙に向かって描くのである。これは、上手に対象を描く訓練だと思われがちであるが実は違う。むしろ、これは対象をよく観察する練習である。対象をよく観察したものほど、結果としてよく描けるようになるのである。従って、対象の形、全体のレイアウトのバランス、陰影のつき方、微妙な曲線などを穴が開くほど見つめ、時には対象に触れて表面のテクスチャや重さを確かめながら観察するのである。そして、描いてみると自分がなにをどう見ているのかがわかる。余談だが、絵を描くのが下手、苦手だと思う人は対象を良く見ることができていないのだ。または、じっくり見てもいないのに、描くことが面倒くさくなってあきらめてしまっているのかもしれない。

描かれたデッサンをよく見てみるとわかるが、デッサンには一筆書きのように一本の線でさらりと描かれたものはない。「これだ！」という対象のひとつの曲線を描くまでには、何十、何百という線を、見ては描き、描いては見ての試行錯誤の繰り返しが起こっているのである。これは、考現学のスケッチと同様に、まさに能動的に見ることの練習であり、描かれたものには自らの目が対象をどのように捉えたのかという観察のプロセスが含まれているのである。

さて、少し脇道にそれたが考現学の方法を特徴づけているのはその観察とスケッチにあることは分かって頂けたかと思う。そして、考現学は人の行動や道具を生活という全

[3] 今和次郎たちが調査した「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録」によれば、実際に洋装で銀座の街を歩いていたのは、男性67％、女性1％であった。新聞などのマスメディアは女性の洋装への変化を喧伝していたが、それはまったく事実と異なる情報であることが、今たちの調査により明らかとなった。

体の脈絡のなかで捉えていくことに常に留意している。従って、目に見える事柄をできるだけ網羅的にスケッチしていく。スケッチひとつが絶対的な価値を発揮するものではないが（表現という意味では充分魅力的である）、それが集積されることにより、類例の代表として捉えることができるようになるとその価値は非常に高くなる。また、そのことによって場所や場合による比較の対象にも成り得るのである。スケッチされた事象は他の事例と比較検討され、また、他のどんな事例と結びつくものなのかが展開される。つまり、この観察とスケッチを繰り返していくことが、次の課題展開を自然に用意してくれるのである。

実際に今らが展開した事例を基にみてみよう。彼らは、まずデパートにおけるマダムの行動を観察記録した。当然、一定量のデパートにおける行動を集めてみると、どのような格好で、どういう売り場を見て、どのような行動をとって、などの特徴が表れてくる。すると、それと対峙する「公設市場ではどうなのか？」「マダムではなく若者の場合はどうなのか？」「貧者と富者での違いはどうなのか？」「時間帯ではどう異なるのか？」と次々と疑問が沸いてくる。松岡正剛は「情報はひとりではいられない、情報は情報を誘導するのである」（松岡, 1996, p. 31）と述べているが、情況との関連で事象をとらえることにより、ひとつの事例の採集は、蓄積されている他の事例に再検討の影響を与え、進んでこれから注目すべきことを示唆してくれるのである。そして、比較される情報が追加される毎に採集記録はより豊かな情報として価値が高まるのである。

## 6. 考現学の手法

考現学の手法は自らが獲得した情報が基になっているが、その視点はどのようなものなのかを明確にするために整理してみたい。佐藤（1994）によれば、考現学のアプローチには以下のような9つの方法[4]があげられるという。

1. 見分けて数える（分類統計法／容姿・ふるまい・持ち物…）
2. 測って想像する（鳥の眼・虫の眼法／ミクロ・マクロの視点から）
3. 見通して比べる（重ねスケッチ法／定点観測・時間別比較）
4. 記号に置き換えて考える（記譜法／ex. 群衆のリズム、100円で買えるもの）
5. ひとつ残らず書き上げる（徹底書き上げ法／ex. 地球家族）
6. 症状を読み取る（破損壊読法／キズ、汚れ、痕跡）
7. 位置をとらえて地図にする（生態分布図法／分布・配置・立脚点）
8. 動きをとらえて地図にする（生態尾行法／ex. 銀ブラ調査、動線・移動範囲調査）
9. 場所ごと人を調べ上げる（ex. 中央線人）

1と3は定量的に採集をする方法である。類例を代表できるサンプル群を集め、それらを比較分類して差異を明らかにする。前述した「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録」などが主としてこの方法によって調査されている。

2は考現学の特徴でもある誰にでもわかるような研究にするために必要な方法である。考現学においては、ディテールを詳細にスケッチとして描き上げるとともに、それが生活という全体の文脈のなかにどのように息づいているのかを記述するのである。

4はある現象をわかりやすいように記号に置き換える方法である。ノーテーションなどと呼ばれるが、ダンスの足の動きから建築や都市研究などにも用いられている。また、比較するための定規を私たちの身近な記号に置き換えることで、ものごとを理解しやすくするという面もある。例えば、村上龍の「あの金で何が買えたか」（1999）は日本の巨額の債務や補償に費やされた膨大な金額を一般人のよく知っているものに置き換えて、リアリティのある情報にしている。また、地球をひとつの村に例えて、世界の現状を分かりやすく示した池田の「世界がもし100人の村だったら」（2001）も好例と言えるだろう。

5と9は網羅的に記述する方法である。例えば、ユネスコが主導して調査をおこなった「地球家族」（1994）という本があるが、これは世界の各地の平均的な暮らしがどのようなものなのかを採集したものである。世界の人達がどのような物を持ち、どのような生活をしているのかを、それぞれ家の前にすべての家財道具と持ち物を出し、家族と一緒に写真を撮影するという形式になっており、各国の暮らしの違いが持ち物を通してまざまざと比較できる。また、場所による特徴をあげることもできる。例えば、三善による「中央線なヒト」（2003）などは、中央線というひとつの路線をとりあげ、そこに集う人達と場所の作り出す風俗文化の相互作用を分析したものである。

6は傷や汚れなどの痕跡から人々の生活を読み取るという方法である。実際に今らは食堂の茶碗の欠け方などを調べて、公営的な食堂における食器類の扱われ方を克明に記している。また、このような方法は、現在でも駅構内などの動線を確認するために、地面や柱のどこが摩耗しているのか調べて有効な誘導の方法などが検討されている。

7, 8はあるエリアにおける分布や経路を地図化する方法である。これは現在でもよく使われる方法だが、最近では犯罪の観点からの「危険な場所地図」作りが小学生や地域住民などの間で制作されている例があげられる。また、防災の観点からも地方自治体がハザードマップを公開したり、震災時の帰路を示した携帯用地図がヒットしたのは記憶に新しい。

考現学は、このように身近な生活文化や人々の行為を誰

[4] 括弧内は筆者により加筆・編集したものである。

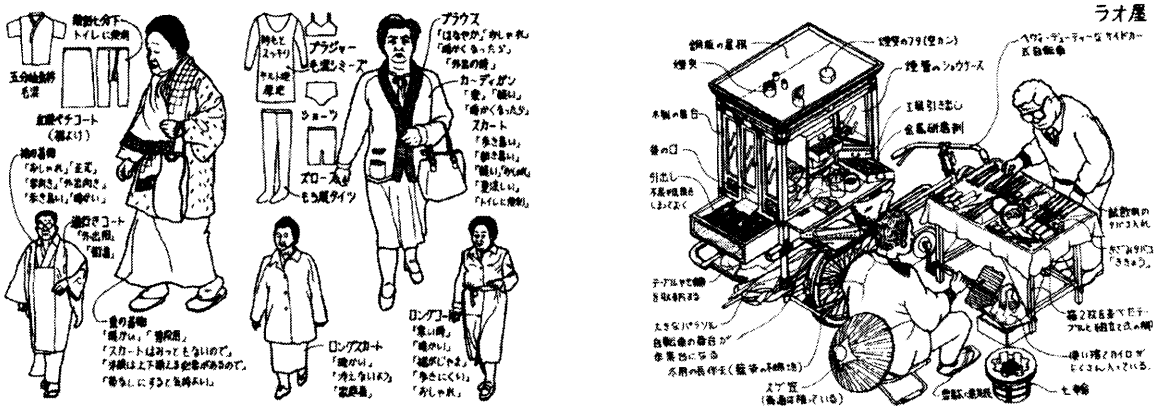



図4　川添登「おばあちゃんの原宿　巣鴨とげぬき地蔵の考現学」1989

にでもわかるような研究成果に仕上げていく方法を採用している。そして、刻々と移り変わる現在を捉える有効な方法であるとともに、誰もが参加できる開かれた方法でもあると言えるだろう。

## 7.　受け継がれる考現学的視点

今和次郎によって生み出された考現学は、未完の学としてはっきりとした体系化をされずに表舞台から消えてしまったが[5]、その後の多くの研究が考現学的視点を取り入れている。直系の研究組織としては、日本生活学会[6]があげられるが、この他にも京都の研究者を中心とした現代風俗研究会[7]、路上観察学会[8]などがあげられる。これ以外にも大学などの教育機関での取り組みや、作家、アーティストなどによる事例もある。これは考現学の方法が、現在においても有効であることを示している。いくつか具体的な事例を取り上げてみたい。

図4は日本生活学会における研究で、「おばあちゃんの原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学」（川添, 1989）である。巣鴨とげぬき地蔵商店街に集う参詣客の服装や、露店の様子、立ち食い風景などが詳細に記録されている。スケッチだけではなく、香具師の口上の採録、おばあちゃん達への聞き取り調査も行われており、一地区を総合的に取り上げた具体的で生活感のあふれる貴重な研究となっている。

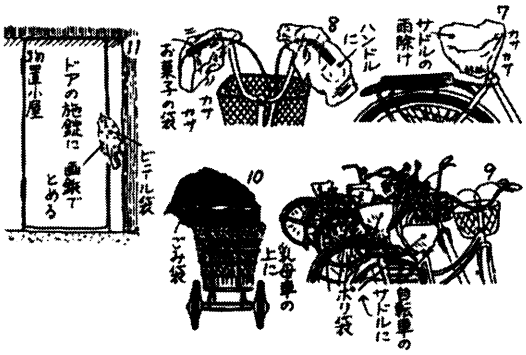


図5　岡本真也・靖子「不思議いっぱい」1997

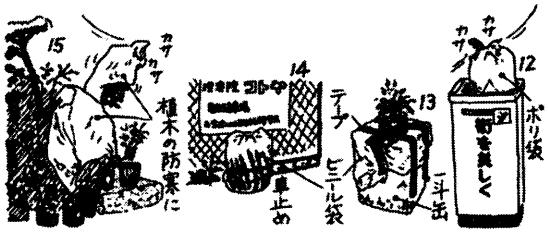


図5

図5は、岡本真也・靖子によるポリ袋の音と使われ方を調査研究したものである。誰もが一度は目にしたことのあ

---

5　1931年に海外視察から帰国して以降、今による考現学調査が見られなくなる。吉田謙吉などの仲間たちによる活動は断続的に続いたものの、組織的な活動は休止し、今自身の活動は、服装研究や家政研究へと移ることとなる。

6　日本生活学会
1972年、今和次郎を会長に設立され、考現学の方法を継承し生活学としてより発展させるべく現在も調査・研究が行われている。竹内芳太郎、宮本常一、梅棹忠夫、川添登などが集った。その設立の主旨は、「生活のなかで人間を発見し、人間を通して、生活を見つめ、そのことによって、人間にとっての「生きる」ことの意味を探求すること—それが「生活学」の立場なのである」と述べられている。http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsl/syuisyo.htm

7　現代風俗研究会
通称、現風研（げんぷうけん）。1976年、故・桑原武夫京大名誉教授を中心に「ひろく現代（明治以降）風俗に関する理論的、歴史的研究」を目的に、日常生活の視点から現代風俗を観察・記録する市民研究団体として発足した。鶴見俊輔、多田道太郎、橋本峰雄らが集った。現在は社団法人として現代遺跡探検、プロレス文化研究、コーヒー牛乳研究などのユニークな研究活動が続けられている。http://kobe.cool.ne.jp/genpoo/

8　路上観察学会
1986年、赤瀬川原平、南伸坊、林丈二、藤森照信、一木努、松田哲夫、荒俣宏により設立される。超芸術トマソン、張り紙、マンホールなどの調査・採集で、路上観察、考現学ブームを引き起こした。学会となっているが、この学会の存在自体が既存学問に対するパロディーでもある。考現学が生んだ継子や末っ子と言われる（ちなみに、長男は日本生活学会、次男は現代風俗研究会である）。

る風景ではなかろうか。あるいは自らも経験があることかもしれない。このようなごく日常の風景は当たり前過ぎて、あらためて見直してみることがないかもしれないが、誰もがついやってしまう行為として、道具と人との関わり合いを再発見するリソースとして充分価値があると思われる。日常的に利用されているポリ袋が、どのように二次利用されているのか、スケッチであるにも関わらず非常にリアリティのある記録となっている。

スケッチを主体とした手法以外にも写真をつかったアプローチもある。これはインターネットという情報発信の場ができたことにより、手軽にたくさんのデータを集積することができるようになったことが一因であると思われる。また、デジタルカメラの普及により、パソコンにデータを集積するという習慣が一般的になっていることもあげられよう。例えば、図6は、佐藤淳一によるFloodgates Japanという日本の河川にかかる水門を採集したものである。普段気にも留めていない水門だが、集めてみると随分といろいろな形態や装飾が施されたものがあることがわかる。同様に図7は住宅都市整理公団による公団住宅などの団地を採集したものである。これもたくさん集めてみるとその思わぬ差異に驚かされる。

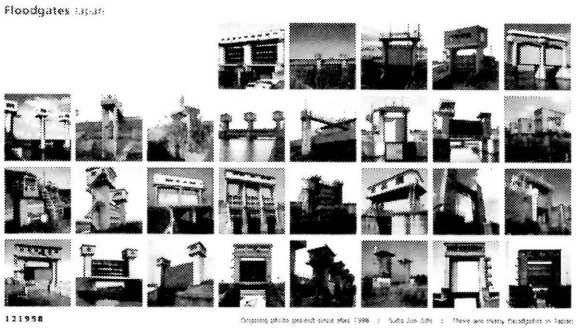



図6　佐藤淳一「Floodgates Japan」1998
http://www.kohan-studio.com/fgjapan/

図7 住宅都市整理公団「住宅都市整理公団」
http://homepage2.nifty.com/danti/

図8はパルコが出している「web across」である。原宿・渋谷・新宿を歩いている若者を中心にどのような服装が流行っているのかを実際に観察・記録しているものである。毎月更新されて、すでに300回をこえる調査データが採集・蓄積されており、年代毎、エリア毎のファッションの移り変わりなどが比較検討できるようになっている。対象地域は距離的にそれほど離れていないにも関わらず、街毎に特徴が異なっており、ファッションからその街の有様を見つめることもできる情報となっている。また、この採集からさらにインタビューなどの取材を重ねて綴じられた「トーキョーリアルライフ 42人の消費生活」は4万部を売り上げるなど共感をよんでいる。

図8 PARCO「web across」2000

図9は都築響一による「TOKYO STYLE」という写真集であるが、東京に住む一人暮らしの部屋を集めたものである。伝統的な部屋や由緒ある部屋などではなく、ごく普通のアパートなどが撮影されている。部屋の主は写っていないが、ついさっきまでそこにいたかのような生活感のある採集となっており、あたかも主の留守中に部屋をこっそり覗いているかのようである。「ごく普通」というリアリティが人々の共感を呼んで話題を集めた本となっている。

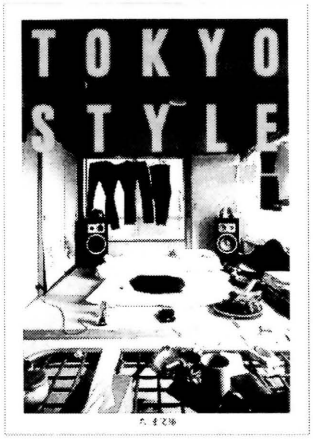



図9 都築響一「TOKYO STYLE」1993

この他にも、考現学的なアプローチで採集をしている研究は数多く上げられる。これは、今でも考現学の手法が誰もが参加できて、かつ誰にも理解しやすい方法なのだと言

えるだろう。また、単なる数字による統計データでは得られない生活世界の情報を採集していることが、これらの事例から理解できるのではないだろうか。

## 8. 誰の目にも見えていることを見落とさない

考現学は現地に赴いて一次情報を採集していくのが基本である。一般的にこのような調査方法は「フィールドワーク」と呼ばれる。他者から伝聞した二次情報ではなく、自分の身体を使って、見て・聞いて・触って・歩いて（あるいは味わって）得た一次情報を基に研究をすすめる方法である。一次情報を得る調査といえば、アンケートや統計を中心とするサーベイというものもあるが、ノンバーバルな情報を得るにはサーベイではなかなか難しい。例えば、誰かに話を聞くという場面を想定してみよう。サーベイの場合には、質問紙やインタビューなどで得られた情報を文字や数値などに置き換えられる場合が多い。しかし、実際の話を聞く現場では、話者は顔をしかめたり、手を動かしたり様々な動作や表情を作っているはずである。また、服装の印象が相手の印象を変えることも多々ある。

ある英会話学校のCMに俳優が「Thank you」というワンフレーズを様々な場面で言うというものがあったが、これも情況によって言葉のニュアンスも意味合いも異なるということを示す好例であった。例えば、赤ちゃんに対しての「Thank you」は生まれてきたことに感謝する、やさしくささやくものであり、友達のおせっかいに対する「Thank you」は大きなお世話を意味した語気のあらいものであった。二つとも文字の記録としては同じであるが、その意味合いはまったく異なる。身振りや表情というものが言葉以上の多くの情報を伝えているのである。

フィールドワークでは、この当たり前に見えている情報を大事にする。「目は口ほどに物を言う」という言葉があるが、私たちのコミュニケーションは言葉以上に、ノンバーバルなコミュニケーションから情報を得ている。しかし、多くの場合は習慣的で当たり前だと思っている行為が多く、つい見過ごしてしまいがちである。また、それらは無意識的に行われていたり、暗黙の了解として為されていたりするので、その情報のやりとりを自覚することが難しいこともある。そこにサーベイなどの調査では充分に反映できない情報がある。そして、そこに光をあてて再発見するのがフィールドワークである。自らの身体を使って現地に赴き、注意深く観察し、見えていること（もちろん、聞こえること、触れたことも含まれる）を具体的にフィールドノーツに記録する。この当たり前に見えていることをじっくりと観察し、見落とさないことが重要なのである。特にフィールドワーカーは、その現場に参加しているという点においては、当事者であり、かつそこに根を下ろしているわけではないという点においては部外者であるという両方の視点をもっている。当事者としての現場での生の体験を採集し、一方で部外者としての生活文化の差異を発見できる立場にあると言えるだろう。この二つの視点を合わせ持つことにより、より豊かに見ることを実践していくのである。

## 9. フィールドノーツへの記述

フィールドワークによって採集された情報はフィールドノーツに記録される。このノーツに記述されることが大きな意味を持っている。前述したが、ノーツに記述されることによって単にカメラで対象を記録することでは得られない、生活世界の文脈の考察や、人々の行為の意味を考える有効な道具として働くのである。

記述するといっても、単にメモすることを指すのではない。現場ではいつでもじっくりと腰を落ち着けて情報を採集できるわけではなく、現場に上手に参与することは簡単なことではない。特に人が多く介在する場では記述する行為が怪しまれることも多々ある。そのような場では、走り書きのメモや簡単なスケッチしか描けないこともある。そこで、できるだけ早くメモしたことやスケッチしたことを、もう一度じっくりとまとめなおすという作業が必要になる。得られた情報を編集することは、現場で体験してきたことを精査し経験を再確認することに繋がる。そして、再確認しながら記述されることにより、生活世界における人々の行為やものとの関わり合いを読み解く厚い記述（thick description）（ギアツ, 1987, pp. 7-8）[9]となるのである。

考現学においては、たくさんの網羅的なスケッチと気付いたことの詳細なメモとを照らし合わせてまとめられることになる。網羅的に集めたことを厚い記述として残しておくことで、記録の中に思いがけない重要な再発見をする場合もある。例えば、ある学生が行ったホームレスの調査では、思いもかけないものが記録されていた。よく駅前などで一度捨てられた本や雑誌を回収して路上のゴザの上で販売しているホームレスたちがいるのを見たことがあるだろう。その採集された記録には、両替用の小銭を分類するトレーが記録されていたのである。調査した学生本人も初めは気付かず、とりあえず記録したのだろうが、教員も交えて改めて見直してみると、彼らが両替用のトレーを利用してあらかじめある程度の金額を所持し、その日暮らしではなく計画的に販売していることが分かったのである。そこから再調査してみると、雑誌を回収する者と販売する者は別々で、それぞれ役割分担がされていることなどが新たに導き出されたのである。ノーツに書かれた情報が新たな情報をよぶと言ってもよいだろう。

また、具体的なスケッチは記憶を再生し、現場の雰囲気

---

[9] 佐藤によれば、「分厚い記述」とは、「フィールドワーカーは見たままの姿を記録するだけでなく、その奥に幾重にも折り重なった生活と行為の文脈を解きほぐしていきます。その作業を通してはじめて明らかになる行為の意味を解釈して読み取り、その解釈を書きとめていく作業が分厚い記述なのです。」（佐藤, 1992, pp. 92-93）と述べられている。

を再現してくれるカギにもなる。前述の例でも、そのスケッチを見ることによって、採集した際の記憶をもう一度呼び戻すことができたのである。放っておくと薄れてしまう記憶や、ごく当たり前の日常で知っていると思い込んでいる事柄ほど、意外な程分かっておらず、そのまま足早に消え去ってしまうことが多い。経験や動きつつある現在を記録に留めておくためにもフィールドノーツへの記述は有効なのである。

## 10.　考現学アプローチの実践

これまで、考現学の手法とその意義を確認してきたが、実際にこれらの手法を用いて学生たちに取り組んでもらった実践を紹介したい。考現学が基本としているフィールドワークやそのワークを実りあるものとするための道具であるフィールドノーツは、解説を読んで学ぶことではなく、実際にやってみることで学んでいくものだからである。以下に示す事例は、筆者が行った高校[10]における実践例である。課題は考現学的視点で日常生活を観察し、気になったことをテーマとしてweb上に事典[11]としてまとめるというものである。

図10、11をご覧頂きたい。これは、電車の中で見られる人々の行動を採集したものである。この学生は、「つり革のつかまり方」「バックの持ち方」「新聞の読み方」について自分の通学時間を利用して観察し、作品として仕上げていった。図10は「つり革のつかまり方」を採集して表現したものであるが、片手でにぎったり、輪の中に手を通したり、混雑時にはドア上部にある電光掲示装置をつかまるところとして利用している人が多いことなどを具体的に描いている。

図11は「新聞の読み方」についての観察であるが、新聞を広げて読んでいるというイメージは男性に多いと感じられるが、意外にも女性の方が新聞を広げて読む人が多いという意外な結果も得られている。また、時間帯別にも調査されており混雑時から閑散時までの行為の変化も記録されている。このように電車内は誰もが見慣れた風景である

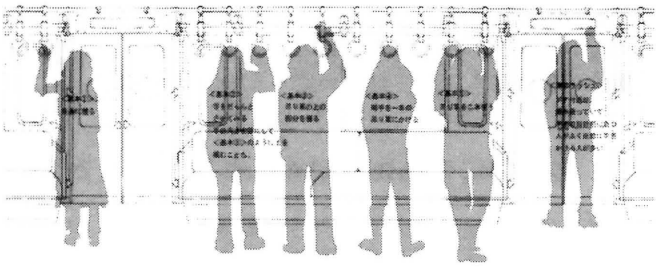


図10　市川ナヲミ「IN THE TRAIN」2004

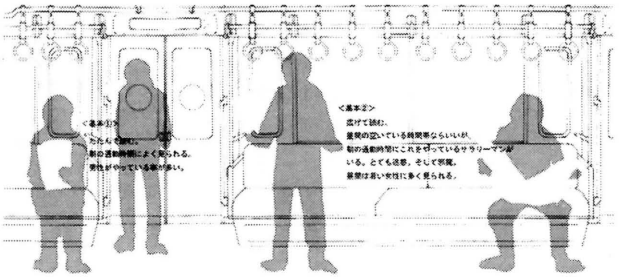


図11　同上

が、あらためて見直してみると、乗客はずいぶんと車内の道具を器用に使っていたり、意外な事実が見えてくる作品となっている。

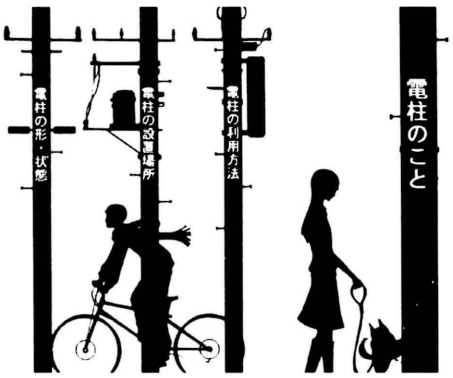
図12は「電信柱」についての観察である。高校生がいったいなんで電柱に興味を持つのかと筆者は訝しく思い作者に尋ねてみたが、作者はずっと遠くまで途切れずに繋がっている電柱と電線を毎日登下校の際に見ているうちに興味が湧いたそうである。改めて言われてみれば、実に様々な利用方法があるのだと感心させられる。電柱単体で設置されているものは少なく、何らかのサインや信号、アンテナ、街灯、看板などの複合された柱として機能していることがわかる。また、作者によれば電柱の腕金とそれにつく機器によっても新しいものか、古いものかが判別できるのだそうだ。携帯電話用のアンテナのついているものはやはり新しく、木造の電柱は今ではすっかり姿を消してしまったということであった。また、現在では防犯灯としカメラや警報装置などを設置したものもあるそうである。電柱を見ることで、私たちの生活の変容の一端が垣間見られる作品であった。

彼らはいずれも高校生で、これまでにこのような考現学的な方法でなにかを採集してくるということはやったことがなかった。それにも関わらず、ごく日常的な出来事を見直してそれぞれ大変興味深いテーマを見つけてきた。考現学の優れた点は、採集して作品や記録が出来上がるということだけではなく、対象を見つめる目が養われるところにある。彼らも採集し、スケッチし、ノーツやwebにまとめることによって、自分が見てきたことを再経験し、見ることについて学んだのである。

---

10　筆者が非常勤講師として務めている高校は全国でも珍しい県立の芸術高校で、美術科・映像芸術科・音楽科・舞台科の4科で、一学科一学年40人で全校480人という小規模の高校である。筆者の担当は映像芸術科3年生のCG造形と映像処理という科目で、主にコンピュータを用いた映像表現を学ぶ科目となっている。担当授業は1コマ90分で2コマ、毎週1回通年開講であった。
埼玉県立芸術総合高校　http://www.geiso-h.spec.ed.jp/

11　事典としたのには理由がある。「じてん」というと「字典」「辞典」「事典」の3つがあげられるが、通常それぞれ区別するために「もじてん」「ことばてん」「ことてん」と言われる。この中で、もっとも広い意味を持つ「事典（ことてん）」を制作することとし，ひとつのテーマに関連する事柄を集めた作品とするということを意図したものである。



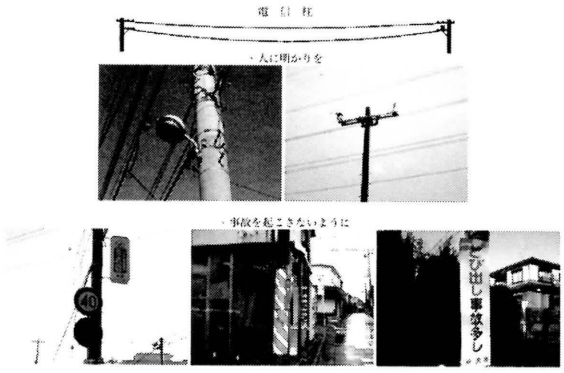




図12　小尾悠「電信柱」2004

## おわりに

ここまで、今和次郎らによって生み出された考現学のアプローチの視点や方法、実践例などを述べてきた。フィールドワークに基づく採集自体は、時間のかかる作業でもある。一度現場にいって、すぐに結果のでるものでもない。ある意味で体力を使う方法である。また、もしかしたら、スケッチという採集方法にそもそも抵抗を感じた人もいるかもしれない。

考現学の手法は、これをやれば有効な客観的なデータが得られるという絶対的な方法でもない。むしろ、たくさんのスケッチと採集データを前に、編集に苦労することも多々ある。それにも関わらず、なぜこの方法を勧めるのかと言えば、表現として語る作り手の視点と、それを受け取る側の視点の交差するところに立脚点をもっているからである。そして、生活世界を能動的に見つめる複眼的なまなざしを得るために、誰にでも取り組める開かれた方法だからである。変化する現在を捉えることは難しく、採集された情報はすぐには役にたたないかもしれない。しかしながら、多くの網羅的に採集された情報が、身の回りの環境を能動的に見ることを教えてくれ、次の問題点や新たな情報を導き出す糸口となるのである。

今後、なにかをデザインするという際には、日常の環境や情況を読み解くことがよりいっそう求められるに違いない。そして、その読解は専門家だけではなく、一般の人々と協働での理解が欠かせなくなるだろう。その際に考現学のアプローチが力を発揮するはずである。

まずはそれぞれの身近なところを見つめなおすところから始めてもらいたい。考現学は机上で行うものではなく、現場での実践でこそ威力を発揮する実践の方法論である。現場ではなかなか思うように進まず、迷走に陥ることになるかもしれない。しかし、それは決して無駄な迷走ではなく、目利きになるための助走だと思って欲しい。現場からは多くの情報が生起している。もう一度見直してみよう。そして僅かでもいい、採集した情報を記録してみよう。

### あとがき

森先生、教員として、また編集委員会代表として、多くのご指導を賜り有り難うございました。先生の学生への柔らかなアプローチも学ばせて頂き、今後の学びの場つくりに精進したいと思います。

### 引用文献

C. ギアツ　1987 文化の解釈学Ⅰ　岩波書店
川添 登　1989 おばあちゃんの原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学 平凡社
今 和次郎　1987 考現学入門　筑摩書房
（初出:モデルノロヂオ 1930 春陽堂）
松岡 正剛　1996 知の編集工学　朝日新聞社
田村 裕・臼井 新太郎・中尾 早苗　2002 デザインリサーチ
武蔵野美術大学出版局
佐藤 健二　1994 風景の生産・風景の解放　講談社

### 参考文献

原 研哉ゼミ　2005 Ex-formation 四万十川　中央公論新社
池田 香代子　2001 世界がもし100人の村だったら
マガジンハウス
川添 登　2004 今和次郎　筑摩書房
松岡 正剛　2000 知の編集術　講談社
マテリアルワールドプロジェクト　1994 地球家族　TOTO出版
三善 里沙子　2003 中央線なヒト　小学館
村上 龍　1999 あの金で何が買えたか　小学館
R. エマーソン・L. ショウ・R. フレッツ　1998
方法としてのフィールドノート　新曜社
菅谷 明子　2000 メディアリテラシー　岩波書店
佐藤 郁哉　1992 フィールドワーク　新曜社
佐藤 郁哉　2002 フィールドワークの技法　新曜社
東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟　2005
メディアリテラシーの道具箱　東京大学出版会